

更申し演べるまでもなく、諸君の既に丁知せらるゝところなれば敢て贅せず、數年前某々等の諸君、我が何々業の漸次萎靡して振はず、日に月に衰退に傾くを以て、之が挽回策を講せざれば遂に廢滅に歸し亦如何とも詮方なきに至るこの事でありましたから、不肖を顧みず振ふて其の衝に當り、種々計畫するところあり遂に共進會を開ひて斯道の發達改良を圖り、物産の隆興販路の擴張を企圖せんと欲しまして、有志者諸君から應分の義指金を乞ひ、外觀の美などは更に關することなく、只管堅牢を

主として建築に着手し漸く工を竣り此に開場し、同業者諸君亦奮發して出品したところのもの、殆んど一万に垂々とするのでムいます、而して其優劣は、追て公明なる審査人に囑托して審査をなさしむる筈でありませんが、其結果の如何は、今日より豫じめ申し難ひのでムいますが、一通り見たところでは、從來の粗製濫造の弊なく、何れも皆精巧を極めたるもの、如くに見受けらるゝのは誠に慶賀の至りに堪へません不肖某出品人に代り茲に答辭を演ぶること、致しました。

◎山林業者大會の席上

三八二

本日は全國の山林業者大會を茲に開かれ、普ねく來會せられて斯く盛會を極むるは満足の至りであります。不肖も其の席末を汚し一言所感を述べたいと存じます。抑も、我が國は有數の山林國であります。にも拘らず其の忽諸に附せられたのは取りも直さず往時に於ける山林學の智識が薄かつたのみでもなく、各地に大小各割據して封建制度を布きたる結果、其の法令制度の同じからざりし罪にも由つたであります。即ち

某地は殖林の事業大に興り、鬱然たる大山林は、實に心地よく生ひ茂つて居るにも拘らず、某地は到る處として秃山ならざるはなく、木林の缺乏甚しきな、ご或るは天然の成行に放任して些しの手入さへせざる地方もありませんな、ご國家經營、治水事業、風景保存等の途より以てしても、甚だ心細き觀があつたのでムります。然るに、王政復古に際會し世は同一の制度に治められしとは云へ、其の當初は諸般は制度に多法を極め、到底山林事業にまで手を附けられなかつたので、政府とて知らな

三八三

三三四
 かつたのではなからうが、兎も角封建制度の放任制度を全國一切に布きたるが如きの感があつたから、各地の山林は一層荒廢を極め、盜伐亂伐は到る所で行はれるといふ不体裁、亂れに亂れし林政は、層一層の亂脈を極めたことは諸君の今に記憶せらるゝ所と思ふ。其後吾々同業者間で到底放任すべからざることを觀て、同業者が檄を傳へ、茲に第一回の集會を催ふし、以て殖林に整理に其の道の學者を顧問となし、着々事業の進行を圖つたのであるが、其の中に政府の基礎も定まり、大に殖産興業

の法を講せらるゝに至つたから、斯くも官私協同の下に略全國の山林を統一することが出来たのでムいます。爾來同業者が集會を重ねること十餘回、益々事業の進歩發達を見まするのは、國家の爲め祝せねばならぬこと、存じますので、不肖を忘れ、一言祝辭に代へて鄙言を陳じましてムいます。

◎土橋落成式の席上

諸君、本日は我が何々郡と何々郡とを連絡すべき土橋の落成式に當り不肖も公職を帯びて此の祝すべき席末に連なつたのは光榮この上もないところであります。

抑々、本工事を起してから約三ヶ月餘の日子を費やしたのでムいすが實は川の幅員は大變に廣くはないのでありますけれども、流れは急であつて、水が深いのだから到底普通の木橋では耐久的でないといふところから、土の厚さが三尺にも及ぶ世間には稀有の土橋を架したのでムいま

す。そこで、打ち見たところは、外觀美を發揮するには足らないけれど、其の耐久力に至つては、能く五十年を支ふるといふに至つては、蓋し當地方のため慶賀に堪へぬ次第であります。で、此の橋は、縣道とか國道とかに架せられたものではありませんが、往來の頻繁であることは彼の大道にも勝つて居ることは、さくに臨場の諸君が知悉せらるゝ所、されば、架設の費用も本郡と隣郡たる何々郡の負擔で、工金總額五千幾百圓にも達したのではあります。將來の幸福は、この工金以上に發展

三三八
 することを信じて疑はないところでムいます。衷心欣喜の餘り、聊か略
 歴を叙して一言の祝辭と致します。

◎新道開通落成式の席上

諸君、交通の要路本日を以て開通落成し、茲に一大舉式を執行せらる
 〳に當り、不肖亦其の席末に連るを得たのは欣喜に堪へないところで、
 一言措辭を述べて祝意を表したいと存じます。

抑々、我が居村は山間の僻地でムいまして、何處の都會、將た何れの地

方へ出るにも、名だゝる峻阪險路を歩み、辛じて登り息急き極まつて下
 るといふ有様だから、所謂朝に飲んだ湯等も、悉く汗と化した後でなく
 ては、各が目指す目的地には達せられないといふ山地であるのでムい
 ます。さればこれと反對に外間より本村に入らんせば、恰も穴の底に
 入りはせずやと思はるゝ程で、世間の文明と遠かり、開化と離れ、眞に
 小桃源と稱されしも無理からぬ次第かと存じます。

然るに、一朝開明の風が此の邊にまで吹き荒んだお蔭には、流石の峻峻

三九〇
 と云はれた某々時も越へず、新たに斯くも平垣である、而も幅廣き道路
 上、優然と人力車の便を借りるに至つたのは、文明の徳とはいひながら
 其の工事の任に當られた諸氏の勞や多とすべきこと云はずと知れたこと
 でムいます。蓋し、將來はこれ迄の山間僻地が一變して文化の風に吹か
 れ、百貨輻輳の巷に化せんとすること、疑いを容れないところで、まご
 とに喜ばしい次第ではありませんか。
 不肖は此の紀念すべき或場に臨み、工事の速やかなりしを謝さんとする

衷心の喜悅は果して何物に勝りませうか。幸多かれ我が居村、嗚呼この
 新道路。

◎懇親會の席上

諸君よ、我々はごうしても離れることの出来ぬ間柄であります、何故で
 ありますか、諸君は我々と竹馬の友ではありませんか、同窓の友ではあ
 りませんか、中學校までも同じにした中ではありませんか、今日も各々
 職のために各所に散在することになりました、けれども元は喧嘩もすれ

ば、中よく遊んだ中ではありませんが、ですから是れからは無理にも都合しまして、月に一度はかならず會合しやうじやありませんか、其れは職に高下もありましやう月給には多少のへだてもありましやう。されどお互ひの心のうちには何の別へだてはないのではありませんか、ですから今後の集會はかならず、月に一回開くことにしまして、何でもお互ひに氣散も吐きまして、おもしろく一日を過ぎふではありませんか。如何も人情と云ふものはおかしなもので、幼少のときは仲よくして居まして

も、長じて職につきますと云ふと忽ち別けへだての情を起しまして、道であつても横を向ひて通るやうになります、さらば何か原因があるか云ひますれば原因も何もありません、早く云へば、競争の心からして、互ひに負けまいと云ふ念慮からして、斯の如く疎遠になるのでありますしかし競争は競争です、何もそんなに表裏をするに及びません、否及ばぬことであります。ですから競争は競争、懇親は懇親としていよくますく研究しやうではありませんか、由つて爰に意見を吐露しまして、

諸君の御注意を促がすことにいたしまして、本日の祝意を表することに
致しませう。

三九四

◎友人結婚式の席上

凡そ人事として最も重んずべきは冠婚葬祭の式ではありますまいか。
其の冠婚に屬する、一生一度の大禮を、爰に親友たる某君が舉行され、
本日を以て不肖等も招待に預り、其の席末に列するの光榮を得たのは、
此上の喜びやありませぬのでムいします。

抑々夫婦なるものは、一身同体の原則に従ひまして、苦樂を共にせざる
べからざるのみならず、其關係は生涯に亘ることでありませぬ、互に
氣質の相合し智識才徳の度も相對さなければなりませぬ、若し此等が不
釣合でありますと、一家の和合は到底望めない譯で、氣の毒ながらも
離婚しなければならぬことなるのですが、幸ひ御面君には、同一の御
氣性と謂ひ、同一の智識才徳と謂ひ、何としても不釣合の点でありませ
ず、天晴れ世間の男女に秀拔なる所ありますれば、欠点とては一もなき

三九五

誠に得難き良伉儷と存じます、仍て聊か祝意を表しまして、一詞を述べました。

三九六

◎新年宴會の席上

諸君よ諸君、本日は明治四十何年を迎へたところの劈頭第一の宴會、所謂年々歳々別段不思儀のことでもないが、人事は常に變遷しつゝあるといふから、この新年を迎へて、本年の覺悟を定め、且つは初陣の祝酒

を酌み交はす目出度い行事といはねばなりません。で、今更ら古めかしき屠蘇とか、萬里の同風とかいつて、六ヶ敷い珍念漢念を並べるのも時世後れでムいますから、茲では一つバツとしたところで、分り切つたことをお喋りして祝意を表することに致しませう。ところが、諸君の中には、こんな御考への人もあるのでせう。即ち吾れ〜人類は早晚死せざるを得ず、殊に人生は五十年を以て限りとす、然るに年の初めに於て之を祝するは、其人類の死に近きたるを祝すると一般にして、予盾の

三九七

三九八
 甚しきものなりと。成程一寸考へますれば年の初めに之を祝するより、
 吊するこそ當然の如くに思はれますが、決して新年を祝するのは左様
 な譯でムりませぬ。人類の此世にあるは世間にて一大事業を爲し、生活
 上立派なる繁榮を得んことを期するのでありまして、此希望を抱けばこ
 そ、將來の一年間に、目出度此一大事業を爲さんとして、新年の初めに其
 年を祝するので、所謂年の延喜を祝するのであります。だから新年を祝
 するは、決して不都合でない、また可笑しくもないので、諸君が之れが

爲めに祝宴を設け、私も亦之に加はる譯でムります。そこで、お互に今
 年も奮發一番、大に事業を成し遂げやふではありませんか、私は其計畫
 の一端として茲に腹案があります、が、これは後日に譲りまして、免
 も角、年の初めの樂しさを、こゝには只無邪氣に祝ひ、喜ばしいではあ
 りませんか。失敬。

◎天長節祝賀會の席上

本日は我が國民にとつては、實に此上ない祝日でムいまして、既に御承知の如く、皇統連綿たる現 皇帝陛下の御誕辰ましましたる嘉節であります。さればこそ、この日は全國中上も下もの別なく、苟くも國民たる者は滿腔の祝意を表し、大杯を舉げて 陛下の萬々歳を壽ぎまつる次第ではムいませんか。

抑々、往時に於ける祝日なるものは、單に無意味なる五節句を拵らへ、この日を以て上下の祝日と定め、盛んに祝ひ壽ぎつゝあつたので、今日

に至る迄も其の弊風退かず、否な却つて盛んに祝ひ祀るではありませんか。彼の地方田舎などは、この日を以て無上の祝日と思ひ定め、一般に業を休み、祝酒を酌んで壽ぐにも拘らず、明治の大祝日たる本日は、冷々淡々の裡、唯役員とか教員とかなどが、思ひくゝに祝ふのみとは情けない有様ではありますまいか。全体、明治の御世となつてからは、かゝる無意味の節句などは、單に個人の隨意に委し、新年と紀元節と本日とを以て三大節と定められ、國家的、國民的の大祝日と定められ、一般に

業を休み以て皇運の無窮を祈るのであります。即ち陛下の御即位あらせ給ひしは、海内最も多事の時であつて、國論囂々たるうち、遂に萬難を排し、この大業を成し遂げ給ひ、尋で郡縣の政より憲法政治を行はせらるゝの今日とはなつたのであります。今日にては、海に汽船あり、陸に汽車あり、交通に便なるのみならず、電信、郵便、電燈、瓦斯燈、時計其他の文明利器ありて、吾れく國民は太平を謳ひ、無事に生涯を送られまする、此等は必竟するに、天皇陛下の御恩澤で、臣民たる者の感

泣せざるべからざる所であると考へます。

凡そ人は身体生命自由財産名譽の此五點に付、他より害せられぬよふにしなければなりません。悪るき人がありましたして吾人を殴打するとか、又は斬るとか、又は財産を窃むとか、又は吾人を誹毀して名譽を害するとか、致しましたならば如何でムりましょふ、吾人は法律の保護に依りまして、其悪しき人を罰せらるゝことを求むるを得ます、即ち告訴告發に因つて當該官は其悪しき人を所罰するのであります、此くの如く吾れ

四〇四
 くに害を興へる者を罰して吾れくの幸福を増進することを務めます
 るは、政府の爲す所でありますが、政府は取も直さず 天皇陛下の政
 府でムりますからして、吾れくに害を加ふる者を除かるゝの世話を爲
 し被下も、是亦 天皇陛下の御恵みでムります。されば吾れく臣民た
 る者は、決して 天皇陛下の御恩澤を蒙ることを疎にしてはなりません
 ぬ、今日は 天皇陛下の御誕生あらせ玉ひました吉日でムりますからし
 て、御徳の万分之一を稱し奉りまして、祝賀の意を表します。

◎忘年会の席上

四〇五
 本日は今年の納め、即ち各々が記念すべき本年も、まさに立ち去ら
 んとするお暇乞ひのため、はた過去を追懐して、來年の計畫を定むる
 といふ集會なのでムりますから、別段に祝辭の祝意のといふのではあり
 ませんが、聊か一言を述べ、以て記念せんかと存じたいのでムります。
 願ひますれば、昨年今日、諸君と此樓に會し、忘年の宴を張りました
 は親しく眉目のあるの感がありますが、最早其れから一年を経まし

四〇六

て、茲に亦忘年の宴を張ることになりました。諸君よ、諸君はお互に何々の役員で、孜孜營々として三百六十日の間業務に従事致しました、其間には色々の混雑事件も起り、社員の間には相嫉視するの傾も生じた事がありました、又甲員と乙員との間には誣罔の言を以て、中傷を加へたりとの事より一場の葛藤を惹起し、其爲め上役に迷惑を掛けし事もありましたが、幸ひに社外人に對しては何事も起らず、至て無事平穩の年でありました、右社員間の色々の紛擾も、年末の片付と共に一段落を告げ

四〇七

て片付きました故、今日は宛かも一年中の大掃除を爲したと同一の心地せられまして、諸君と茲に忘年の宴を開かれたのでムります。されば今年中の事はお互に一切遺忘に付しまして、更に明年の目出度春を迎へなければなりません。依て私は此の思ひ出多き本會に對し、所感を陳べて以て忘年の辭と致します。

◎友人の學校卒業祝宴會の席上

我が親愛なる何某君足下、今日は君がため、正に將來の一大紀念日であつて、又社會に踏み出すべき一大階梯たる祝日なのであります。此の時に方つて、不肖また君の友人としてこの席に連る、まことに光榮と存する次第であります。

抑々、學生が其母校を卒業するのは、恰も商人が獨立で以て社會に立ち商業取引を創むると一般、即ち社會に足踏み入れるの初めであります。

この点に於ては君も正に同様であつて、如何に學術の濫奥を究め、高尚の素養を受けたるにもせよ、社會學校に入るは本日只今からだぞ存じます。が、兎角學生の業を了へて社會に立つ時は、依然として學生風を脱せず天真爛漫の舉動に出るのが多いから、世人は其の豫想したかの如く、信用を措かず、暗に体裁のみにて輕視するの風があります、是れ必竟學生は世の風潮に染まざる爲め、時としては儼然として品位を高尚に構へ、

四一〇
 時としては婦女子や老人輩の機嫌を街ふと謂ふ事を知らざるが爲めであり
 ます。猥りに威厳を作り、猥りに愛を買ふことの如きは、卑陋千萬な
 る次第ではありますが、俗社會に於ては俗社會に向くの方針を執らなけ
 れば、到底社會に屹立する勢力を有することは出来ぬのであります。君
 も此意を体せられまして、社會の大學院に入られんことを、偏に希望の
 至りに堪へませぬ。聊か卒業を祝しまして、蕪詞を演べ、以て祝意を表
 すること、致しました。

◎友人の昇給祝賀會の席上

營業を爲す者は、自己に利益を得んことを欲すると一般で官廳に奉職す
 る者や、銀行會社に出勤する者は、其昇給を望むこと人情の常ではある
 が、容易に昇給の得らるべきものではありません。ところで、君は何銀
 行に年久しく出勤され此度はまた御昇給になりました目出度存じます。
 是れ平生勤勉にせらるゝと同時に、總て行務を取扱はれるに、方正謹直

を以てせらるゝからであります、私も實業には豫て心掛けて居りまするもの、由來官廳に奉職したる者でありますからして、俄に官廳に奉職することは出来ませんが、亦俄に民間の會社とか銀行に出勤するの便もなく、縱令銀行に出勤すればとて、君の如き高給を受くる身とはなれませぬのでムります。あゝ君や幸福といふべく、羨望の燒点に立たるゝ果報者といつて差問へはなからうかと存じます。これは獨り不肖のみでなく同座の諸君一樣だらうかと思ひます。何卒將來は君の果報にあやかりた

く、一言燕辭を述べました次第でムいます。

◎洋行者歸朝祝賀會の席上

諺にも百聞一見に如かずと云ふ事がムりますが、外國の文明事業を視察しまして、自己の見識を作り、國家の爲めに益せんと思ふ者は、幾人ともなく世間にあることゝ存じますが、さて外國に旅行することは容易の事ではないので、よしまた行つたとしても實際視察を遂げ歸朝する者は

渺いのであります。然るに當村の何誰君は、曩きに東京に出で某大學に
 入り法律學を研究せられつゝ、あつたが豁然思ふ所あつて洋行を思ひ立ち
 私費を以て歐米各國の商業を視察し、精密なる調査を得て一昨何日歸朝
 せられました。其外國にあること五年、殆んど風に櫛り雨に沐して、視
 察を遂げられたる熱心は誠に感服の至に堪へませぬ、今日は同君の歸朝
 を祝する爲め、同志相集りまして同君を招待致しました次第で、私は謹
 で同君の海上無事歸朝せられたを祝すると共に、其視察を遂げられて得

たる御見識を、我内國に於て實行せらるゝ曉に、我國の利益となること
 を確信し、我帝國の爲めにも祝するのであります。

◎先師の追弔法會席上

爰に故何々先生第何回忌祭法會に當りまして、吾々門下生一同が此の
 堂に集まり、親しく先師の法會を営みますのは、今更ら新しき悲慈が交
 々胸をつくやの感がムります。

抑々、吾等一同は故先生の門下に在つて、共に俱に瑩雪の勞を積み、親

四一六
 しく先生の膝下に在つた同窓の氏、密々の感とて不肖と同様かと存じます、先生は資性が温厚篤實でムいまして、われ／＼門人を見せらるゝ常に愛子の如きであつたことは、既に日に諸君の熟知せらるゝ所かと存じます。その門下生一同が、同じく膝を交へて此の堂に會するの時に方り我が敬愛する先生は唯々一片の木碑と化し去られ、幽明處を異にしたのは、不本意も甚だしいとはいひながら、また人世の常かと悟らるゝのであります。諸君よ、斯かる悲哀の感に打たるゝ亦淨世の慣例として、冷

然一欲する譯には参りません、が、如何に狂し、如何に人事を盡してもこれのみは致し方がムいけません。唯々希くは先生の靈がこの處に來つて、われ／＼門人の微意を諒とせられ、舊に變らざる師弟の情を酌まれんこと、偏へに祈る次第でムいます。

◎異域に病死したる友人の追弔法會席上

嗚呼本日は何たる悲しむべき日でムいませうか、爰に會したる滿堂諸君と共に、最も我等の親愛する何々君追弔法會を執行しやうとは、誠に

思ひ掛けないことでありまして、人事無常有爲轉變は免れないとはいへ斯くまでも無慘、冷酷なものかと、染みく無常を觀するの念さへ生ずるではムいませんか。臨場せられたるの諸君も同感とは存じますが、生前の何々君が血色、其の勇壯なる風姿は、今日の當り見るやの思ひがあつて、一片の煙幽かにたなびく邊り、唯一基の位牌に化したとは、如何思つても思はれぬではありませんか。

抑々何某君は性冒險を好み、常に勇壯快活であつたが、今思へばこれ

ぞ、誠に同君の爲め悲しむべき凶報を齎らした原因となつたのでムいます。君は昨年の初秋を以て世界一週を思ひ立ち、勇ましく遠征の途に上つたが、其の時が永遠の袂別であらうとは思ひ掛けない次第で、且つ殘念至極と存じます、同君とて、中途病に斃れたときの所感、さこそ同情すれば實に涙の外はないのでムいまして、斯かる人物の死が、國家の爲め如何ほどの不利益、如何に惜むべきかは、諸新聞が筆を揃えて痛嘆したのに徴しても分明ではありませんか。君は常に人に謂て曰く、人は

早晩死を免れぬが、婦女子の手に死するは恥辱の至なり、願くば屍を馬革に包んで、原野に曝らし度きものなりと、是れ全君が曾て軍人たりし氣象より此言を爲し、ものでありませうが、此度冒險事業を創めて、未だ尖ならざるに病の爲めに異域に死することは、定めて全君には残念に思つたことさこそ存じます。私は全君が無事歸朝の日を期し、朝野の士を一堂に會し、以て盛んに全君の歡迎宴を張らんと思ひましたのに、此悲しむべき報に接し、友情として實に忍びないのみではなく、吊意を

表するさへ勝手が違ふやうに思はれてなりません。

◎不慮に斃れし軍人追悼法會の席上

諸君、諸君と共に悲しむべき悼むべき法會に列することの悲運に際會したのは、何たる事でういませう。爰に友人某君、某隊に編入せられて現役に服務中、圖らずも不慮の災に斃れられし悲報に接したことの、如何に哀しかつたかは蓋し思ひ半ばに過ぎるものがありませう。全体、軍人必らずしも戦死を以て無上の名譽とのみ云はるゝでもムリま

せん。其の職務に勵みて、遂に不慮に斃れしが如き、また一大功績といつて差し聞へなからうかと存じます。實にや、君の職に斃るゝや、最後まで軍人の本務を忘れず、其の危難に處して、シカモ平然、毫も平素に變らざるの態度を示し、战友の恐れて難を避けたるも、尙悠然迫らず、以て瞑したるが如きは、誠に軍人の龜鑑として耻しからぬではありませぬか。さればこそ、事、天聽に達するや、畏くも戦死と同様の待遇を賜はり、陸軍葬儀令に依つて盛んなる葬祭の執行せられたのは、また瞑

して餘慶ありといつても宜いのでムりませう。今日君が生前の知友相會して、塋を爰に設け、君が追悼法會を營むに當つて、萬感胸に迫るものあり、心に思ひて口に出でざるもの多々、聊か一言を陳じて、君が靈前に手向けた次第でムいます。君や夫れ吾等が微意を酌むで來り饗けらるれば、幸榮何物にか勝りませう。嗚呼……………。

新演説終

明治四十三年九月十三日印刷
明治四十三年九月十七日發行

著者

松浪猛彦

大阪市南區安堂寺町四丁目百九番邸

發行者

井上尙一

大阪市四區本町通一丁目

印刷者

一書堂工場

複製
不許

發賣元

東京麴町區飯田町二丁目
大阪南區安堂寺町四丁目

井上

一書堂

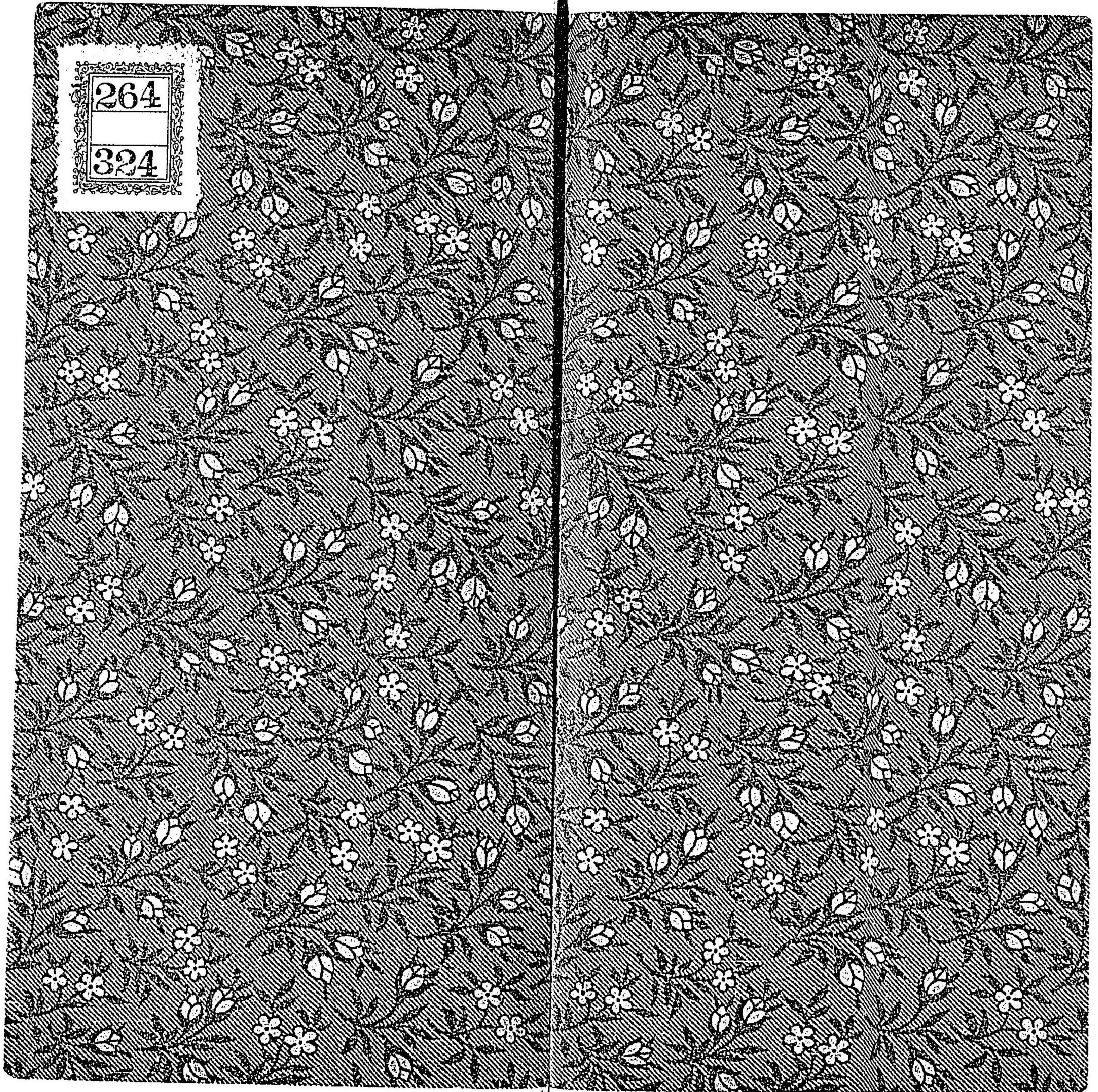
振替口座番號
東京一九八〇九番

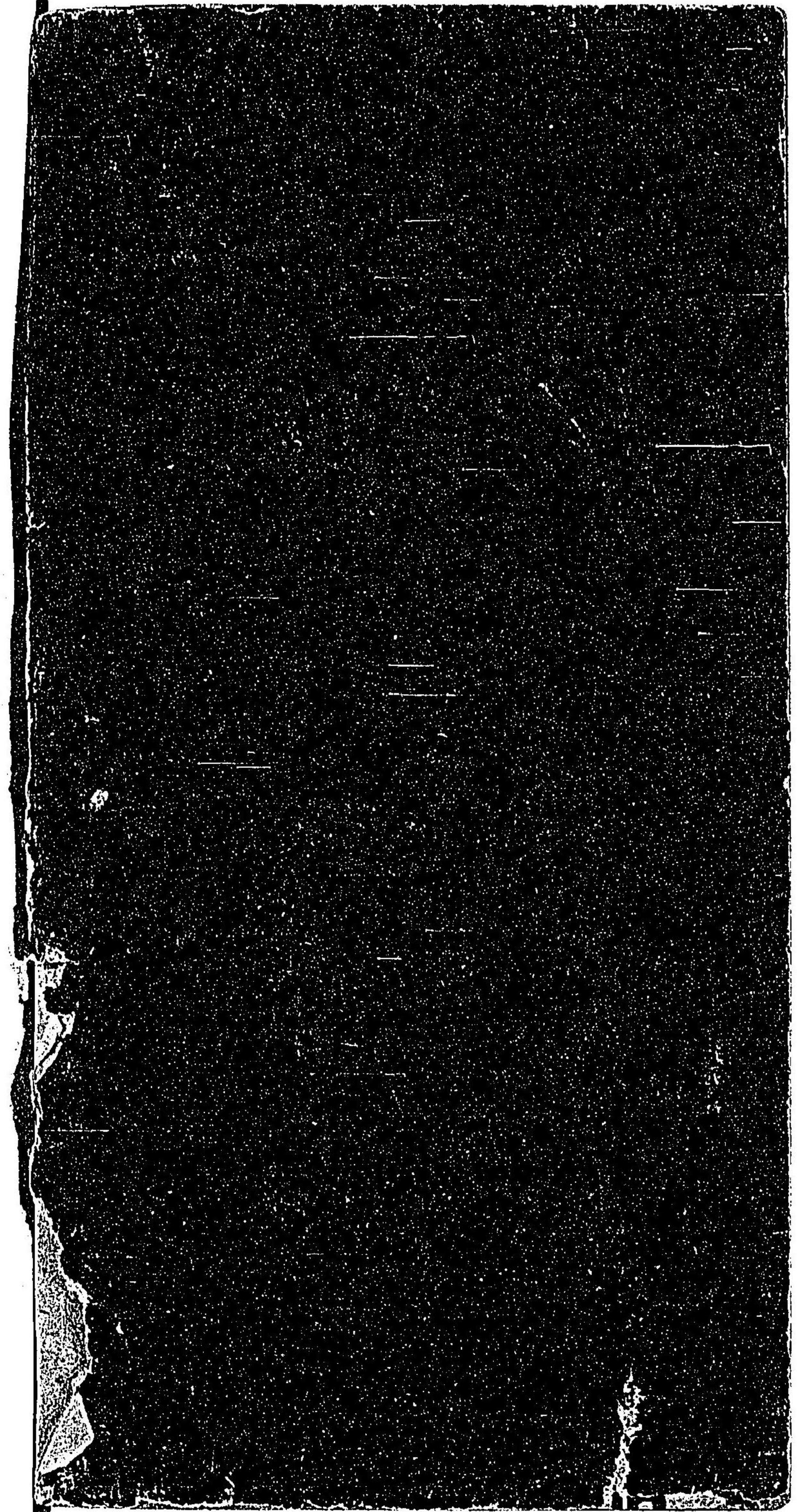
振替口座番號
大阪三四九四番

定價金卅五錢

264

324





特28

885

076825-000-3

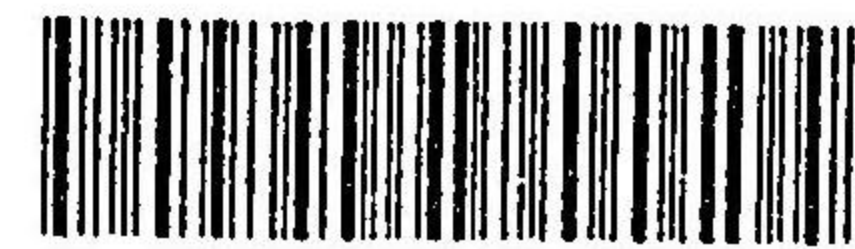
特28-885

模範新演説

松浪 猛彦/著

M43.9

DAB-0183



264

324